

Realism For Social Sciences (リアリズム方法論としての) について 浦井 憲

リアリティということ、認識論に対峙する存在論ではなく、それと整合的な、「社会(認識)」的な存在論として再構築する立場と整合的であり、またそうしたことを行うにあたって、「認識」に先立つ「経験」ということに幾許かの特権を与えようとする立場とも、その特権が大きすぎない限りにおいて(学問とその自由性という大枠を外さない限りにおいて)整合的であるような、学問的立場(学問することで生きる仕方のための「私」という主体のプロトコル)について。

1. 概要

21世紀に入って早20年。前世紀に於ける「近代」化、科学技術の進歩、世界戦争と核、冷戦と国連を通じた世界秩序、そしてその上に立つ資本と企業による文明が、世紀をまたいで今日、我々に多くの問いを投げかけている。ソ連崩壊後の米国一極化の時代は、民主化、グローバル化、そして9.11以降テロとの戦いといった掛け声とともに、中東の戦乱を拡大し、国際秩序、真の平和といったことに向けて、我々の「知」の無力さを知らしめるものとなった。地球温暖化、資源リサイクル等の環境問題、リーマンショックといった国際金融の問題と貧富の格差の問題、フクシマの原発事故に代表される科学技術と国策、人権問題と政治の関わり、前世紀から引き継いで来た種々問題が、今日に至ってはそれら自体を単純に把握することのできない、国際社会における政治とパワーバランスの問題として、把握されるべきことが不可欠なものとなっている。それは国家間のみならず、巨大な資本、国際金融や多国籍企業を含めた力の問題と、切り離せないものであり、しかもそうしたことは、そうしたパワーバランスから独立では存在し得ないマスメディアによる情報の偏向ということまで含めて、既に今日公然なものとなりつつある。言うまでもなく直近においては、新型コロナパンデミックに見る、国際的な医療および健康福祉問題と政治および経済の問題も、その典型と言わなければならない。

このような中で、今日の「知」は、果たして独立した、確固たる足場を持ち得ているのだろうか。日々の情報は圧倒的にメディア産業を通じたものであり、また科学技術は時の社会における産業と深く関わらざるを得ない。思想といえども、そうしたものから自由ではありえない。事実、「問う」ことが許されない(あるいは「問う」価値が無いとされる)問題というのは数多く存在し、それらもまた、我々が今位置する「現実」社会の趨勢に(そしてまたその今日の代表である資本および産業に)大きく依存している。いわゆる職業的な専門家集団というものも、本来の、学問というものの「営み」が何であるかということに関わらず、そうしたリアル社会の現実の中で、分断され、細分化された営みを、続けて行かざるを得ない。

いくなれば(近)現代における「知」は、凡そ、その専門化され、細分化された形式の行き着く先に於いて、現実社会としての資本もしくは産業といったリアリティに翻弄され、まさにその自らの根拠としての「自由」を喪失しつつあり、そればかりか、更にはそのこと自体にも、無自覚であるほかはない(そのような問いは、専門化された各分野内のものとして価値がない、とされる)。今日、「知」がそのようなところに行き詰まっている、というような言い回しをしたものの、実のところ、知と社会と、それらの進展もしくは動き、といったものは、決して個別別個に独立したものではない。知のとある形態は社会のとある形態を規定し、また逆にそこから規程されてもいる。知の行き詰まりはそのまま社会の行き詰まりでもあり、現(近)代の「知」の「危機」があるとすれば、それはそのまま現(近)代の「社会」の「危機」でもある。今や「近代」に向けた乗り越え、少なくとも何らかのオルタナティブが必要とされているというのは、そのような意味においてである。



私自身は経済学理論を専門とし、一般均衡理論という、「市場」メカニズムを通じた「社会」の「全体」把握(論理的あるいは数学的)を、その研究の目標とする立場である。社会というものについて、そのような全体的把握ができるか、ということに対して、描き切ることなどできない、と言ってしまうのは簡単なことである(そしておそらく正しい)が、私自身の職業的な立場上、それは「できない」では済まない。もしできないと述べたいのであれば、「できないことを証明」する必要がある。もちろん普通そのようなことはせず、「こういう場合であればできる」といった、特殊な話を重ねていくことになる。経済学理論におけるモデルというのはそのようなものである。

故に、理論家はそうしたモデルの特殊性、その特殊な条件の詳細という意味において、現実≒実在の汲み尽くせなさということについては承知している。けれども当該の理論家でなければ、そのようなことは他に任せ、問題とはせず、それらに「リアリティ」を一方向的に重ね合わせ、そして様々な「現実」問題に適用する。専門知とはいずれの分野でも、そのようなものとならざるを得ない。そのような限界を宿命とし、そしてそのように分断された知が、適当につきはぎされて、現実の間に合わす外ないという(例えば経済政策にせよ、医療行為にせよ)、そのような悲劇に、我々は日々リアルに直面している。



専門化され、細分化され、分断された「知」は、何らかの形で、総合されねばならない。そしてそれは、本来の学問の営み、知の営みとして、なされるのでなければならない。そうでなければ、そのような知の現実に向けた適用は、今日の社会の「現実」においては市場競争という名の下で産業(資本)に隷属するか、あるいは政治という言葉に隠された暴力的闘争に支配されるものとなる。

「知の営み」としての総合的真知の追求ということが、考えられなければならない。それは市場的競争でも政治的闘争でもない、学問的協調と協働のプロセスでなければならない。

ここで主題として挙げた「Realism for Social Sciences 社会科学のためのリアリズム」ということが（少なくともその果てにおいて）目指すのは、そのような指針（あるいは指針と呼ぶべきですらなく、指針のようなものを仄めかす、痕跡、のようなものであるかもしれないが）、プロトコルである。ルールであり、かつ（恣意的という意味で）ルールではない。それがあつたためには、そうあるより外ない。学問的であり、かつ学問（スル）のために、我々が、個人（私）として社会（世界）と関わることを通じ、また関わるための、そのような未定義で最も広義の「方法」が、未定義で最も広義の「学問」に対して、常に新たな形で与えられる、そのような学問的協調と協働のプロトコルであり、プロセスである。政治的闘争でもなく、市場的競争でもない、そのような「学問的協調と協働」のための、運動プロトコルが、個人（私）の、この「社会」において「生きる」（少なくとも「学問」的に）ためのプロトコルとして、与えられるということである。

以下では Realism For Social Sciences (RFSS『社会科学のためのリアリズム』) について、これを「運動」と呼ぶが、それは社会科学の中だけに止まらない、中から外に、そして外から中に向けての「働きかけ」ということを強調してのことであり、「運動」ということそのものを、名詞として確定して、主語的に既定しようとする意図ではない。（そのような試みは、いわゆる「具体性を置き違える誤謬（ホワイトヘッド）」と、常に分類されることになるであろう。）このことは、簡単のため、2段落上で用いた「総合的真知」というような表現についても同様であり、そのようなものに向けた「追求」という「知の営み」としての動態が、ここで強調したい事柄である。RFSSという運動は、そのような「真知」に向けられた「多即一」の学問的協働作業であり、そこに関わる「誰もが中心であり誰もが周辺」であるような、緩やかな学問的プロトコルでありかつ、プロトコル的学問というものの表現である。そのような、最も緩い意味での学問的方法（方法論）を与えようとするものである。

2. キーワードとプロトコルのための図式

Realism For Social Sciences (RFSS『社会科学のためのリアリズム』) のプロトコルを与えるチャートのために、4つのキーワードを挙げる。まず何を置いても、リアリズムということの意味を与える「实在」。そしてその3態と言べききものと関わる「社会」、「問い」、そして「運動」である。



● 实在

まず、RFSSに於ける「リアリズム」という言葉の使用を、その凡そ最も広義のものとして共有するにあたって、ここでは「汲み尽くせないリアリティ＝实在の汲み尽くせなさ」ということをもって、それを行いたい。すなわち、何を「現実＝リアル」と呼ぶか、おそらくそれは人によって様々であり、またその意味で、人によって「实在」（性）の捉え方も様々であるかもしれない。けれども、我々はその（实在ということの）汲み尽くせなさ、言葉にせよ、数式にせよ、理性によって切り詰めた道具のみをもっては把握し難い、何某かの「痕跡」のようなもの前にあるということ、そのことについて、そこに向けられた希求とともに、共有し得る。そのような立場として、リアリズムという言葉を用いる。

● 【運動】

これは（学問的、学問による、また学問のためでもある）運動であり、おおよそ最も緩やかな意味での「学問的方法」と呼ぶことができるもの（言い換えれば、最も緩やかな意味での「論理」と言えるもの）が、ここで提起されている。運動＝movementという言葉、あまりその全体性が見極められたようなものとして、つまり確定された名詞として、主語的に、用いることが意図されているのではなく、個による、社会による、学問による、或いはそれらに向けての、「無限」の「働きかけ」ということが、意図されているものである。最も緩やかな意味での「論理」というのも、そうした「働きかけ」ということにおいて、共有（協調、協働）し得る「学問的方法」という意味で、用いられている。

● 【問い】

「（新たな）問い」ということ。あるいは「（どこまでも）問うという行為」が、ここでは重視される。また、問うということが、ここでは「学問」の根幹として捉えられている。「知」は当然知ることによって形作られるが、学問

はここで「問う」こととして、言うなれば「知」に向けられた「働き」として、広義に把握される。例えば「問う」ことそのものが特別な存在論的コミットメントを裡に含むというような深遠な問いを含めるとしても、明らかに呼応におけるその片方として、問いの共有は、その呼応、全体理解の共有に比して、容易であろう。存在論的問題を命題（問い）の真偽ということに帰着させることを許容するような場合であれば、尚更である。問いと応え、その全体理解ということと言い直すならば、ここで「共有」されるべきものは「問い」であり、結論を含めた全体についての理解ではない。根本的にすべてを疑ってかかるという姿勢が、むしろ唯一の共有されることとなる。

●【社会】

「私」たちが、必然的に「社会」（という共時的かつ通時的な全体性としてのリアル）に棲み込んでいる、（その事自体に気付くことすらできていないような部分も残して）棲み込まされている、ということ。そしてそのような社会の「in 中で」、あるいは社会に「for 向けられたところ」の、新たに創られる問い（主体性というをここで重視すれば想像力といったこととともに、リアリティはその契機となる）ということが、この鍵概念の背後にある。それを通じて、「全と個」の問題、「多即一」の問題としての「全体性と、問うことの無限性」の把握、倫理、公共性、そして「実践」のリアリティということが、学問の方法（学問スル）ということとともに、位置付けられる。

我々は「汲み尽くすことのできない」実在というものを前に、個々においてレベルの異なる、様々な概念の抽象化とともに、世界（社会）把握と、理解、そして把握しきれない実在に向けた、個々の「（新たな）問い」の中に棲み込む（込まされている）ところのものである。RFSS とはそのような「実在」を前提とし、またそういう「私」たちの「問い」に基づいたコミュニケーション、そしてそこにおける運動であり、学問的方法、プロトコルである。

図式において、実在をとりまく三つのキーワードは、それぞれ実在の三つの異なる様相でもある。

【社会】は、その最も直接的なフェーズであり顕現である。経験の様相とも言える。それに向けられた【問い】は、個（私）がその社会（世界）に棲み込まされていることへの気付きといったことも含め、知、学問、サイエンス、としての様相である。例えば、上述した「個（私）の棲み込み」ということへの気付きを伴わない場合、我々はそれを通常「経験科学」と呼んでいる。上部の【運動】は、更にそういった学問、科学の根底を司るところのものであって、構想力、想像力（*守永氏）、あるいは深い意味での遊戯（村田氏）、ウィトゲンシュタイン的にはゲーム、西田においては宗教と呼ぶかもしれない、アーレントにおいては人間的「活動」と呼ぶ、そのようなフェーズである。あくまで「学」的に（その範囲で）そこを指し示す（抽出する）ためには、それはやはり何らかの「論理」（学の方法という意味での広義による）と呼ぶべきところのものである。

ただし、この三態の関係は、上で順をもって述べたような垂直的なものではなく、図式にあるような円環的なものである。それが、実在の「汲み尽くせなさ」の下においては、個（私）というものが「棲み込まされ（てい）る」ということを通じて、常に新たなものの契機となる（塩谷氏）」ということであり、「実践」ということを通じて技術（サイエンスに対するテクノロジー）の舞台である【社会】が、改めて【問い】に、あるいは【運動】へと、直接的、間接的な「働きかけ」を持つ。すなわち、【運動】に対して、また【社会】は働きかけるのであり、三態それぞれが実在の異なる顕現として、相互に影響する。「個（私）の棲み込み」ということが固定される場合、「経験科学」という言葉と同様、この最後の働きかけが、しばしば「現実」主義という意味で、「リアリズム」を代表するところとなる。

実在をとりまく諸相として、以上の議論はなお「学」としての視座を通してという意味で、限定的であることを、最後に付け加える。これは【問い】の範疇に当てられた、「学問」という制限いかんによるところがあるので、部分的な拡張（例えば【問い】の中に、音楽的、絵画的な問いかけを含めるといった）は可能かもしれない。しかしそうした場合、そもそもここで提起されているような図式（可換図式の形式）になぜ拘っているのか、という問いの学問的要求には、応えることができないであろう。RFSSが学問的な運動であるという枠を越えて適用されるのだということであれば、もちろんそういった点に拘る必要など、そもそもないのであるが。

3. 補足

(1) 喜びということ：

RFSSで重要とされるのは「理性に先立つ経験」のようなところから「全てを問い直すスタンス」であるが、そのような「問い」の根源性は、往々にして「個」の存在根拠そのものとも関わって来る（それは「個」の生き方そのものまで、直接関わってきてしまう）ようなところがある。通常、「学問」においてその健全な手段である議論・討論といったものが、ここで既に「手段としてその限界に近いところまで来ている」ということを意識せねばならない、そのような位置にまで、このRFSSという運動の根拠と必要性は及んでいるように思われる。例えば、我々が「根源から問い直す」という場合、そのことのおそらくは、なぜそれが必要かということの鍵とも思われる）「（問いの）喜び」を、どのように共有（共感）できるのかということ。これもまたRFSS運動において、そのプロトコルに期待される重要事項である。

これは「問うことの自由性」ということに関わる問題であり、自由性は、その「問う」主体にとって、自らの「個」としての（個別の）「リアリティ」に根ざしている。従って、そのことを通じて、「問う」ということの根源性を、

リアリティに結びつける（そうした個別のリアリティに根ざすものとして扱う）ことができる。これは「哲学スル」あるいは「どこまでも問う」といった内容に向けて、新たにリアリティということに根ざす形で、それらを把握しなおせるということを示唆しており、また（対象としては）異なる個々のリアリティというその相違を乗り越えて、相互に「問い（そしてその喜び）」を共有できる、そのような枠組みを提示する、そのような可能性を示唆する。

議論・討論の意義を、論駁とか、目的（対象）に向けての説得ではなく、共感や共鳴、共振といった（喜びとしての）自由自在な展開に開かれたものとする、RFSSをそのような運動として（政治的闘争ではなく、協調と協働の学問的コミュニケーションプロトコルとして）基礎づけることが、必要である。

（２）公共性について：

公共性という問題は、上記図式中の【社会】において、「全と個」ということに関わって表出する問題と分類することができる。いわば【社会】において、それは「個」と対峙して出てくる「全」の問題であり、真の公共性とは、そのような対峙が、【社会】と【問い】の間で、「私」の問いとして、「私」の棲む、棲み込まされている「社会」における、私の責任の問題、倫理の問題、個と全の「無限」の葛藤の問題として、「実践」ということと共に表出するところのものである。

（３）ヘーゲルの弁証法との関わりについて：

上記RFSS図式においては、学問の「方法」ということに関連して、「論理」という言葉をヘーゲルの用いており、その意味での論理と（数学と）いうことを、当然それらを取り残している問題も「ある」ということを含めて、その全体図式として、展望してしまっているところがある。しかしながら、この展望の具体的なあり方それ自体は、先の「運動」という言葉の名詞的な使用と同様、当該の展望の名詞（主語）的固定性に意図があるのではなく、その展望内容が指し示している「働きかけ」において、すなわち、あくまで「学問」的であるという枠から出ないということ、指し示しているに過ぎない。ここでは展望を可換図式的に与えたが、それは可換図式的な表現が、最も緩やかな意味における論理の一端を形勢するものとして不可欠という見込み（そこまでを拒否するならば、話は根本から変える必要があるが）とともに、逆に言えば、「学問」という概念の方をどこまで拡大することができるのか、という視座を与えるものとして、ここでの一つの展望の型を提供するところとなっている。

ここまで何度も強調して来たように、緩やかな論理（もしくは方法）という表現を伴いつつ、【運動】という言葉、RFSSに向けて用いて来たことには、動きということを強調しつつ、作用ということ、そこに主体性も加わる形で述べれば「働き」といった、そういった全体を表現する上での便利さ、また言葉としての簡単さ、加えて、そこから引き出されるメッセージ性も加味してのことであるが、上のような「学問」（それ自体も開いた意味で、その定義の拡大ということも、広義の方法、緩やかな論理ということに委ねつつ、含めて）ということの枠内で、与えられた展望の型ということを踏まえつつ、ヘーゲルの弁証法との相違も、明らかにしておかねばならない。

ヘーゲルの弁証法ということと、RFSSの依拠するスタンスとの間にある相違（それがあれば）は、まず一般に20世紀以降の「関係性」や「プロセス」が、いわゆる「近代」を乗り越える、ということにおいて持つところの相違と通底していることは当然であり、同時に、追加的にここでの強調を、上述した「緩やかな論理」（とそれによる展望）との関わりで述べるならば、ここで言う「緩やかな論理」というものが、「主語的」な論理を避けるということの強調とともに提供されているということ、その「展望のあり方」までを含めて、可能な限り非主語的な「関係性」化、図式で言えばその可換性、即ち作用、「働きかけ」の形を通じ、改めていく、「問い」直していく、そのようなスタンスであるということに、まとめ直せるのではないかと考える。

「緩やかな論理」というものが、いかに広い意味での論理であっても、我々が今日、通常（学問）的に用いる言語は主語的なものであり、その意味で、ヘーゲルの弁証法というものを語る「そのための」論理が、いわば「主語的」であるということから脱することはできない。この小論でもしばしば「運動」という言葉、「真知」という言葉がそれを代表したように、「関係性」なり「働きかけ」の、少なくとも契機として、そういった主語的なものを用いざるを得ないという根本的問題が、常に我々の（少なくとも今日の言語的）学問に関わっている。（たとえそれが事後的に、脱存在論化できても、具体例から入ることを、我々は、ほぼ宿命的に、それこそリアリティとして、受け入れざるを得ない。）

ヘーゲルは大論理学において、その徹底したカント批判の中においては「どこまでも問う」こと、その「無限」の問いの重要性を徹底しながらも、それが「無限」として主語的に語られねばならない宿命がある限り、ありとあらゆる名詞は、固定化され、主語となり、そして「具体性が取り違え」られる危険性と表裏一体に関わっている。そうした不要な（具体性の取り違えが顕著な）主語的名詞を、述語化、関係性化、プロセス化していくこととの必要性が、そこに常にあるのではないか。

そのような問題を表面化するために、例えば西田は、ヘーゲルの「概念」ではなく、「場所」的な論理という言葉を用い、また「私」と「自覚」といったことを（主体性に基づく「働きかけ」の契機として）そこに取り入れ、いふならばヘーゲルの客観性とも、また解釈学的な主観性に偏った嫌いからも距離を置いた、主客合一、多即一、一即多、ということを抱括した視座を、導入したと考える。RFSSにおいても、「運動」という言葉、「真知」という言葉、「論理」、「方法」、鍵概念となる主語的名詞に向けては、そのような姿勢が貫かれてしかるべきである。

2020.10.4 日本経済学会向けに原稿を調整